

1930年代後期の中国人日本留学生の文学・芸術活動 ——「文芸同人誌」〈文海〉について

小 谷 一 郎

私はこれまで、東京左連再建後の中国人日本留学生の豊かさ、自立的な活動を、当時中国人日本留学生が出していた諸雑誌を見ることなどによって検証してきた。

東京左連は、31年に華蒂、任鈞等によって結成されたが、33年に起きた留学生に対する大量検挙事件「華僑班事件」によって壊滅的な打撃を受け、その後、再建の命を受けて来日した林煥平、魏晋、孟式鈞等7名によって33年12月に再建された。再建された東京左連は、日本プロレタリア文学運動の「挫折」を踏まえた江口渙等の助言を受け、従来の非合法的な活動を改め、同人形式による合法的な雑誌の発行、活動を展開することになる。江口渙が彼らに同人形式による活動を求めたのは、同人形式ならば人々の出入りが自由であり、それでいて活動の中核を自分たちが占めることができ、官憲側の監視の目も潜りやすいということにあった。彼らはこの提言を受け入れ、同人形式による〈東流〉、〈雑文〉（後に〈質文〉と改題）、〈詩歌〉などの機関誌を発行する。

折しも、円と元とのレートの逆転などの理由から中国人日本留学生の数が急激に増大し、これを受けて留学生の間では、同郷会誌、校友会誌などが発行され、「美術研究会」などの様々なグループ、研究会が結成され、それこそ自在で、自立した活動が展開されていくことになる。その時、彼らの活動の「磁場」としてあったのが「芸術聚餐会」だった。

芸術聚餐会とは、「聚餐会」ならば集会の届け出が不要だったことから、35年2月から神田の中華基督教青年会の食堂を会場に開かれるようになった中国人日本留学生の集まりのことである。「聚餐会」的なものは外にもあった。だが、その中で、最も大きかったのが中華基督教青年会での「芸術聚餐会」である。そこには、東京左連のメンバーだけではなく、時の中国人日本留学生内の様々なグループ、関係者も会していた。ここで取り上げる「文芸同人誌」〈文海〉もそうした、時の自在で、豊かな雰囲気の中から生まれたものの一つと言って過言ではない¹⁾。

〈文海〉の特徴は、何よりもまず、それが「文芸同人誌」だったことにある。当時、留学生が出していた雑誌としては、中華留日明治大学校友会の校友会誌〈学术界〉、広東省大埔同学会の同学会誌〈大鐘〉、山西省留日同郷会の同郷会誌〈文化〉、翻訳を旨とした小沢叢社の同人誌〈小沢叢〉などが挙げられるが、〈文海〉は、同人の大半が東京左連の〈東流〉、〈詩歌〉などの寄稿者、関係者でありながら、あえて自分たちの「文芸同人誌」を持つとしたもので、〈文海〉の特徴もここにある。

私は、時の東京左連の同人たちの中で自身の「同人形式」の文芸同人誌を持つとし、それを果たした例としていまのところ〈文海〉以外に知らない。だが、こうした〈文海〉について残されている資料はきわめて少ない。小論は、この〈文海〉について、創刊の経緯、同人の足跡、〈文海〉の特徴など、現時点で調べ得たかぎりを報告しようとするものである²⁾。

(一)

<文海>は1936年8月15日に創刊された。

同人の一人李華飛は、のちに回想「關於郭老在東京的回憶」(<抗戰文芸研究>84年第1期 84年3月)の中で、<文海>創刊の経緯について次のように述べている。

1936年春、桜が満開の時だった。文学が大好きな李春潮(抗戰で帰国、延安に行き、解放後は広西で文化工作の責任者を務めた)、覃子豪(抗戰で帰国、[重慶の政治部——小谷]第三庁で工作。47年台湾へ行き、星詩社を作った)、李華飛、羅永麟(現在華東師範大学教授)が、上野公園の草むらで車座になりながら、文学雑誌の刊行について話し合った。皆が興奮して話し、手分けして、仲間を募ることにした。続いて参加した人に、李虹霓、万林川、宋寒衣、魏晋、彭湃、黄君玉、蔣野薇等10数人がいた。その後、春潮が市川を訪ね、郭沫若にお出でいただき、話しをしていただきたいとお願いした。郭沫若はこの雑誌に<文海>と名付けてくれた。

これが示すように、同人誌<文海>は李春潮、覃子豪、李華飛、羅永麟によって企画された。雑誌刊行の話を持ち出したのは李春潮だったという。

<文海>によった彼らの繋がりを知るためには、彼らの日本留学以前に遡らなければいけない。というのは、彼らの関係が日本留学以前にすでに出来上がっているからである。

李華飛は本名を李明誠という。1914年10月24日の生まれで、四川省巴県の出身である³⁾。この李華飛の回想に、<文海>同人の覃子豪について触れた「隔海祭詩魂——憶覃子豪」(<新文学史料>1987年第1期)がある。

それによれば、李華飛と覃子豪との出会いは次のようなものだった。

李華飛は、中学を卒業後、同郷の蔣代延、戴天と大学受験のため北平に行き、西単の堂子胡同にあった永大飯店に泊まっていた。夏の盛りで、スイカを買ってきて皆でほおぼっていた時、彼らの訛りを聞いて「四川の人では？」と声をかけてきたのが覃子豪だった。

覃子豪は本名を覃基という。1912年1月12日の生まれで、四川省の広漢県の人である。覃子豪は、その時「文学的雑誌」を出すためその仲間を求めている。李華飛が自分が新詩を書き、重慶で新聞の副刊の編集をしていたことがあると覃子豪に話すと、覃子豪は「そりゃあいい！遊びに来な、西直門外の孔徳学院にいるから」と住所を教えてくれた。

李華飛は、その後、中国大学経済系に入学した。だが、彼は生来の文学好きから経済学系の授業では飽きたらず、中文系の授業に出、<華北日報>に詩や散文を投稿、やがて自身の原稿を携え覃子豪のところを訪ねるようになった。李華飛は、そこで覃子豪と同じ孔徳学院にいた朱顔(錫侯)、周麟、賈芝、沈毅と知り合いになる。

ここに名前が見える賈芝とは、「胡風批判」の中で連座し、断罪され、辛酸を舐めた賈植芳の兄である。

賈芝は、1913年の生まれ、山西省汾城の出身で、本名を賈植之という⁴⁾。賈芝は、32年山西から北平に出て、阜城門外にあった中法大学孔徳学院高中部(大学予科)に入り、覃子豪と一緒にになった。二人は、寄宿舎の同じ部屋に住み、共に詩を愛し、思想的傾向も一緒だったことから急速に親しくなった。覃子豪は、李白、バイロンを愛し、自作の詩が出来るといつも朗誦して聞かせてくれた。

孔徳学院での賈芝、覃子豪、朱顔、周麟、沈毅等の交流のあり様は、賈芝の回想「憶詩友覃子豪」

(〈新文学史料〉1988年第3期)に詳しい。

当時の孔徳学院は、どこか「桃園園」的などころがあり、彼らはそうした中でバイロン、シラー、フランス象徴詩人ヴェルレーヌ、ボードレール、ランボー、国内の詩人では徐志摩、穆木天等、現代詩派の作品に心引かれながら、同時に愛国主義的な革命思想にも燃えていた。賈芝、覃子豪、朱顔、周麟、沈毅等はそこで詩社「泉社」を結成し、毎週土曜日に互いの詩作を持ち寄り、批評し合うなどした。

泉社の同人朱顔は、本名を朱錫侯といい、周麟と同級、賈芝の一級上で哲学を専攻していた。周麟は社会科学に詳しく、沈毅も朱顔等と同じ哲学系でボードレールが大好きだった。

そしてここに賈植芳が加わることになる。賈植芳は、1916年の生まれで、32年夏、兄賈芝について北平に出て、北新橋にあったアメリカ教会学校の崇実中学高中部に入学した。その後、賈植芳は、兄賈芝のいる孔徳学院高中部を頻繁に訪ねる中で朱顔、沈穎、周麟、覃子豪等「泉社」の人々を識り、交わるようになる⁵⁾。

だが、やがて「泉社」の人々もそれぞれの道を歩み出すことになる。

35年夏、四川省江安の人で九州帝大に留学していた趙生仲が北平に来て、馮潔忠の家に住んだ。馮潔忠は李華飛の中国大学での同級生で、李華飛は馮潔忠の家を訪ねた時、趙生仲に会い、趙生仲から日本留学を強く勧められ、留学を決意する。李華飛がその時日本留学を決意したのは、中学時代の同級生羅永麟が早稲田大学に留学していた、李華飛がその時第二外国語で日本語を取っていたからでもある。出国旅券は、趙生仲が同じ江安の出身でかつて北洋政府の教育総長を務めたことのある「実力者」傅増湘に頼んで作ってもらった。李華飛は、留学を前に、別れを告げるために覃子豪のところを訪ねた。すると、覃子豪は「一緒に行く」、自分の名前も加えてくれと言う。こうして、李華飛と覃子豪は、共に日本に留学することになる⁶⁾。

「泉社」の人々は、覃子豪が日本に留学するに当たり、「各人が同じ範囲を共有しているどうかは不安なのだが、それぞれが早くに自己の境界を構築することを念じてやまない」と序文に認めた彼らの最初の詩集『前影集』を紀念に出版した。この詩集『前影集』は、その時、李華飛が「未婚の妻」だった成都の女友だち楊少雄に送った一冊が残っているだけだという。『前影集』の巻頭を飾ったのは覃子豪の詩「竹林之歌」で、その詩は「新月派」やボードレール、マラルメまどフランス象徴詩派の影響が色濃い詩であった。その後、朱顔、沈穎、周麟もフランスに留学する⁷⁾。

日本に着いた李華飛、覃子豪等は、下関で趙生仲の出迎えを受け、その日の中に列車で東京に向かった。東京駅には趙生仲からの電報を受け取っていた羅永麟が出迎え、李華飛、覃子豪は小石川の「白山寄宿舍」に入った。彼らはその翌日から東亜高等予備校に通い、羅永麟の紹介で東京左連の機関誌〈詩歌〉に作品を発表し始める。

この羅永麟については、李華飛の中学時代の同級生で、早稲田に留学していたということ以外何も分からない。羅永麟の名は興亜院発行の『中国人日本留学生調』にも出てこない。また、その名は東京左連の機関誌のいずれにも見えず、羅永麟と東京左連との関係についても何も確認が取れていない。

東京左連の機関誌〈詩歌〉は、35年5月10日に創刊された。「編輯発行兼印刷者」は「東京市杉並区高円寺3丁目239番地 岸方」の雷石楡、「発行所」は同番地の「詩歌社」である。李華飛の作品が〈詩歌〉に見えるのは、35年10月10日発行〈詩歌〉第1巻第4期の詩「渡洪江」が最初である。覃子豪の作品(詩「碼頭」)は、35年8月5日発行〈詩歌〉第1巻第3期から見える。したがっ

て、彼らは「35年8月」までには来日し、来日後、時を措かずして〈詩歌〉に寄稿したものと思われる。

〈詩歌〉には李春潮も関係していた。李春潮の名が〈詩歌〉に見えるのは、35年6月28日発行の〈詩歌〉第1巻第2期の「給編者の信」が最初である。李春潮はそこで一読者として〈詩歌〉の編者（雷石楡）に対し、自分はまだ〈詩歌〉の同人ではないが、〈詩歌〉のあり方には賛意を表すと言い、その上で、〈詩歌〉が「より多くの現実的叙事詩を創作すること」、「より多く世界の名詩を翻訳すること」、「より多く新興詩論を紹介すること」、「情け容赦なく「反動」的詩歌を除去すること」、「厳しい自己批判を行うこと」などを求めている。李春潮はその後〈詩歌〉に参加したのであろう。〈詩歌〉第1巻第4期の「論文」欄には（陳）紫秋訳の「A・倍茲勉斯基」を受けるかたちで、李春潮のソビエトのプロレタリア詩人ベズイミヨンスキーに関する論文「倍茲勉斯基」が掲載されている⁸⁾。

李華飛は、すでに述べたように、李春潮、覃子豪、李華飛、羅永麟等以外に、李虹霓、万林川、宋寒衣、魏晋、彭湃、黄君玉、蔣野薇等10数人が〈文海〉に加わったという。

だが、ここに、その時覃子豪と共にいたもう一人の人物を挙げておかなければならない。それは賈植芳である。

賈植芳は、朱顔等が前後してフランスに留学し、李華飛、覃子豪等も日本に渡ったことを知ると、36年春、単身来日した。東京に着いた賈植芳は、ただちに、賈芝から教えてもらっていた覃子豪の住まい「白山寄宿舍」を訪ね、翌日から覃子豪の隣の部屋を借り、白山寄宿舍に住んだ。覃子豪は白山寄宿舍に前後しながら半年ほど暮らした。この「中国留学生を専門」にし、木造二階建てで、2階が下宿、1階が食堂、主人、女中さんたちの住まいで、主人は大陸浪人だったという「白山寄宿舍」とは、東京小石川区白山御殿町115番地にあった「白山女子寄宿舍」のことではないかと思うが確証はない。「白山女子寄宿舍」はその名の通りもともとは女子寄宿舍だったが、昭和4年11月老朽化のため、新たに「市外中野町高根14番地」にあった「十五銀行」の社宅を買収し、修理の上、希望する学生をそこに移した後、昭和5年1月梅津駒治に譲渡され、「賃貸経営」されるようになった⁹⁾。そしてここには李春潮も住んでいた。

賈植芳は回想「憶覃子豪」（前出）の中でこう書いている。

私が東京に来る前、彼（覃子豪——小谷）は共に白山寄宿舍に住んでいた李春潮、四川の同郷で早稲田大学の学生だった李華飛、羅永麟等と文芸団体文海社を結成し、大型文学月刊〈文海〉を編集、出版していた。私も誘われてその編集事務に加わった。

これでお分かりいただけるであろう。李春潮の出身については不明だが、〈文海〉の「核」となっていたのは、四川省出身者なのである。しかも、彼らの関係は既述のように日本留学以前から密だった。そして彼らは日本留学後も〈詩歌〉、「白山寄宿舍」などで緊密な往来を繰り返していたのである。〈文海〉創刊にいたるエネルギーの源もこうした彼らの結束の固さ、情熱にあると言えるだろう。

（二）

李華飛は、〈文海〉創刊の経緯についてさらに次のように証言している。

李春潮も＜詩歌＞社のメンバーで、文学雑誌を出すこと提起した。(李)春潮が組織を、(覃)子豪と私が編集の責任となり、羅永麟と李虹霓が訳稿の校正に当たった。1936年春、郭沫若先生にお願いして＜文海＞と名付けていただき、座談会を開き、20名以上の仲間と会食をした。創刊号には小説、散文、詩歌、評論、翻訳など30数編が収められた。郭老と秋田雨雀先生は＜文海＞のために原稿までお寄せくださった。「献詞」は発刊の辞の代わりに、子豪が書いた。私は編集後記を書いた。編集が終わった後、(李)虹霓兄弟が上海に持って行って「太平洋印刷公司」に渡し、印刷に付して、1936年8月15日に出版された。侯楓兄が経営する「上海聯合出版社」が総販売店を務めた¹⁰⁾。

ここに見える「太平洋印刷公司」についてはいまのところ何も分からないが、「上海聯合出版社」は日本留学生だった侯楓が開いたもので、侯楓は、36年3月25日、上海で文芸雑誌＜東方文芸＞を創刊した。この＜東方文芸＞には東京左連の欧陽凡海、覃子豪、蒲風、郭沫若等が寄稿している。上海聯合出版社設立の経緯は不明だが、私がいま注目したいのは、それとほぼ同じ時期、36年8月16日に引擎出版社が上海で出した＜現世界＞半月刊(錢俊瑞主編。実際の編集工作は李凡夫、柳乃夫)、引擎出版社についてである。

＜現世界＞を出版した引擎出版社とは、それまで生活書店の錢俊儒の下で働いていた柳乃夫が、日本留学生だった胡一声、鄭天保に働きかけ、日本留学生、南洋華僑から資金提供を受け、その基礎を築いた¹¹⁾。このように、その当時、中国人日本留学生は、日本国内で雑誌を発行すると同時に、中国国内の雑誌に寄稿し、自身の文章を発表していたばかりではなく、共同で出資し中国国内で出版社を興し、そこに自身の文章を発表することまで行っていた。こうしたことは、時の中国人日本留学生による文学・芸術活動の「したたかさ」を示す格好の例だと思う。

＜文海＞が日本留学生だった侯楓が起こした上海聯合出版社と何らかの関わりがあったことは確かであろう。たとえば、後に見る＜文海＞第2期の「要目」を掲載した＜詩歌雑誌＞も出版元は上海聯合出版社である¹²⁾。

上海聯合出版社も引擎出版社と同じように、日本留学生からの出資をうけていたのではないか。そして、このことが、のちに見る賈植芳の言う、＜文海＞創刊号が、印刷後日本に送られた時、官憲によってすべて没収され、＜文海＞が停刊に追い込まれたということと関係しているのではないだろうか。

以下は、そうした＜文海＞創刊号の「目録」である。この「目録」は、小谷が＜文海＞創刊号の「目次」と実際の＜文海＞の所載の文章とを付き合わせ、訳文の原作者、原載誌等々を補い、作成したものである。

＜文海＞創刊号 1936年8月15日発行

編輯兼発行者：東京小石川区中華留日青年会 155 信箱「東京文海文芸社」

販売総代理店：上海霞飛路 523 号「上海聯合出版社」

印刷者：上海白克路羣壽里 11 号「上海太平洋印刷公司」

覃子豪「献詞」

【紀念高爾基】 李春潮「悼高爾基」

紅飛「高爾基的死」

- 秋田雨雀「給中国的青年藝術家」(特別寄稿)
- 【論文・介紹】 李春潮「郭沫若先生「七請」理論的再認識」
 淑侶訳「三個時代」(斯達魯起亞珂夫著)
 余頌訳「蘇聯大衆与文学」(除村吉太郎著)
 俊儒訳「朝鮮文壇的作家和作品」(朝鮮・張赫宙著)
 郭沫若「関于天賦」
- 【小説・散文】 叔風「奇遇」
 楊素「一個不滅的儀型」
 渾人「俊子」
 余頌「晚婦」
 林川訳「胆力」(M・高特索夫作)
 李華飛「刺」
 彭弄梅「雷家坪之夜」
 蔡松「老戰士」
 野薇「女店員」
 水工訳「信」(小林多喜二著)
- 【詩】 覃子豪「我祈祷在亜波羅面前」
 李華飛「一株海草」
 陶映霞「南風」
 西露「帰来吧」
 彭湃「這裏已留不住欲帰の人」
 甦夫「塞北曲」
 駱駝生「壳『納豆』的少年」
 程「送別」
 冷風「給祖国」
 陰息衆「芸人」
 覃子豪訳「播種之夕」(法国・雨果作)
 黄白瑠訳「休勒耶吉引的機織」(徳・海涅作)
 李虹霓「開拓了的処女地」(世界名著介紹)
 鴻怡「中国文工工具的改革問題」
 編者「後記」

ここに名前が見える「淑侶」とは李華飛、「楊素」は李虹霓、「野薇」は蔣野薇、「林川」は万林川のことである。彼らの名は、すでに見た李華飛の回想「関于郭老在東京的回憶」(<抗戦文芸研究> 84年第1期 84年3月)に、李春潮等の呼びかけに応えた10数名の人々の中にその名が見える。ただ、李虹霓、蔣野薇、万林川に関しては本文に記したこと以外、何も分からない。

「だが今! 民衆の敵に対する恨みの熱血は/すでに最高潮に沸き立った/あなたが命令してくれば/あの悪魔めを、消滅させるのも簡単なことだ」と、詩「給祖国」で、祖国中国に対する思いを歌い上げた「冷風」とは、蔡冷楓、蔡北華のことである。蔡北華は、1916年の生まれで、広東省

中山県の人。本名を蔡冷楓といい、「柳岸」という筆名で<詩歌>第1巻第4期に詩「漁夫」を発表、留学生内のエスペラント活動でも中核的な役割を果たした¹³⁾。

詩「塞北曲」を寄せた馬甦夫は、本名を馮劍南という¹⁴⁾。彼は東京左連に関係していたが、その後、組織上の関係から東京左連を離れたといわれている。だが、<文海>創刊時はまだその関係が保たれていた。馬甦夫の仕事としては、36年1月10日発行の<留東新聞>第15期所載の「田間的『未明集』読後感」、36年11月15日発行の<東流>第3巻第2期に寄せた「国防文学的詩歌問題」などがある。

また、詩「売『納豆』的少年」で、母を亡くし、父親が満州で両足を失い、一家の五人の生活を一人納豆を売りながら支えている少年の思いを綴った駱駝生は、「満州国」からの留学生である。この駱駝生は、「満州国」からの留学生で東京左連に参加したことが確認できている唯だ一人の人である¹⁵⁾。

このように、<文海>には広範な人々が参加していた。<文海>は、既述のように四川省出身者で、「白山寄宿舎」という互いがそば近くにいた李春潮、覃子豪、李華飛、羅永麟等を基本とした文芸同人誌である。にもかかわらず、その時、どうしてこれだけの人々が<文海>に参集したのか。私は、ここに当時の中国人日本留学生の中にあつた「うねり」のようなものを感じる。彼らは東京左連の活動に不満を抱いていたわけではない。そのことは、彼らの呼びかけに応えた人々の中に、東京左連を再建したメンバーの一人魏晋の名があることによっても明らかであろう。東京左連は、その時、「同人形式」による「創作」を中心とした<東流>、その名の通り「雑文」や「評論」を軸とした<雑文>、「詩」や「詩論」を旨とした<詩歌>を発行していた。彼らはそれに不満だったわけではない。若い彼らはただ自分たちの「文芸同人誌」を求めたのである。このことは、裏返せば、その時、彼ら中国人日本留学生の文学・芸術活動が、いかに豊かで、自在なものであつたかを物語っているとも言えるだろう。

覃子豪は、「発刊の辞」に当たる「献詞」の中で、自分たちを「一群の戦闘的なカモメ」に準え、我々は「暗闇の島の上を旋回しながら／嵐に抗し／大波を打ち破ってきた」、「私たちは叛逆のカモメ／荒れ狂った海の上を雄々しく飛び」、「確かな道筋に従い／大陸の鼓動を遙かに望み／祖国に向けて沈痛なる歌を歌う——ああ！我らの受難の祖国よ／早く偉大なる力を備え／この暴風雨の時を迎えてくれ」と歌いあげた。

おそらく、これが彼らに共通する思いであり、多くの人々が<文海>に参集した背景なのであろう。

覃子豪の「献詞」の後に見えるのはゴリキーに対する追悼文である。ゴリキーは、<文海>が編集されている最中、36年6月18日に亡くなった。東京左連は、36年10月10日発行の機関誌<質文>第2巻第1期で誌面の半分近くを割き、「紀念高爾基」の特集を組んである。<文海>同人は編集の途中でゴリキーの死を知った。彼らは、急遽ゴリキー追悼の文章を認め、「紀念高爾基」として創刊号に割り込ませた。彼らは続く第2期で本格的なゴリキー追悼特集を組む予定だった。創刊号の「後記」にはこう記されている。

我々が原稿を集め、印刷に付そうとしていた時、ゴリキーが他界した。本期は慌ただしい中、二編のゴリキーに関する紀念の文章を収めただけに終わった。時間の関係から、我々は第2期で全力でゴリキー紀念の文章を準備するしかない。本会同人はここにあらためて哀悼の意を表する。

この第2期で予定された「ゴリキー記念」の文章が、後に見る〈文海〉第2期「要目」の李春潮「論 M. 高爾基的芸術」、余頌「高爾基与文化事業」である。

「後記」にはまた、創刊号に秋田雨雀、郭沫若の原稿を仰ぐことが出来たことに対する感謝の辞が記され、続いて、「とりわけ郭沫若先生は本刊が永く続くこと祈念し、多くの貴重な意見を寄せられ、本刊を「文海」と命名してくださり、本当に感激している」とある。

秋田雨雀が〈文海〉のために寄せた一文とは秋田雨雀の特別寄稿「給中国的青年芸術家」¹⁶⁾、郭沫若の文章とは「関于天賦」のことである。

彼らは同じ四川省出身の「先輩」郭沫若を心から敬愛していた。彼らは雑誌創刊を前に李春潮が郭沫若のところを訪ね、彼らの座談会で郭沫若が講演してくれることを願い出、雑誌名を「文海」と命名してもらった¹⁷⁾。

郭沫若が彼らの座談会で話したというのは、〈文海〉第2期の「要目」に見える郭沫若「与大衆握手」（評論）のことで、その全容は〈文教資料簡報〉1985年第4期所載の郭沫若「和大衆握手——談目前的文学論争」によって知ることができる。「和大衆握手」は副題に「談目前的文学論争」とあるように、郭沫若が時の「国防文学論戦」に対し、思うところを述べたものである。郭沫若の話記録していたのは李華飛である。郭沫若「和大衆握手」には「1936“九一八”的次日 華飛記」とある。李華飛はこれに続いて、37年1月付の「附志」を付け、「この筆記は、本来〈文海〉第2期に発表予定だったものだが、該刊が停刊になったため留めていたものを、いま改めて公開する。時期をいささか失している感があるかも知れぬが、その内容ば、いまもってその価値を失ってはいない」と書いている。

この郭沫若の「和大衆握手」は、1984年10月、王錦厚が四川省図書館で抗戦文芸の資料を調査していた時、該館の朱美欄から郭沫若の佚文があると聞き、調べている中で、1937年2月発行の〈思想月刊〉第1巻第1期から見つけだしたものである。王錦厚は、これが「郭老の二つのスローガンに対する見方を明確に示しているというだけでなく、茅盾同志だ提起した“創作の自由”という“誤り”を厳しく批判し、さらに当時の文芸界の様々な分岐を解決する有効な手立てを示した、三十年代文芸論争における歴史的文献である」と、高く評価している。そう考えた王錦厚は、その資料性を李華飛に手紙で問い合わせた。以下は、それに対する李華飛の返事である。

「1936年春、李春潮、覃子豪、李華（李華飛——小谷）、李虹霓、羅永麟の5人は日本東京で勉強し、いずれもが文学が大好きな青年で、虹霓の外はみな“詩歌社”の仲間だった。趣向も近かったので、春節の時、雑誌を出すことを話し合い、郭沫若先生（当時は‘郭老’などと呼んではいなかった）を訪ね、構想を話し、「文海」と命名していただいた。彼は「関于天賦」を書いてくれたばかりでなく、‘文海’成立の座談会にも参加してくれた」、「当時、文壇では‘二つのスローガン’（国防文学、大衆文学）の論争が盛んで、郭先生は座談会で「文化与大衆握手」というお話をしてくださった。私が記録した」、「記録は〈思想月刊〉に発表した外、重慶で出版された〈春雲〉1巻5期に「文化与大衆握手」と題して発表したことがある」。

このように郭沫若と〈文海〉の同人たちは親密な関係にあった。彼らは、郭沫若を同郷の「先達」と仰ぎ、敬愛していた。これが「文芸同人誌」〈文海〉のもう一つの大きな特徴である。

〈文海〉創刊号「論文・紹介」欄の最初に見える李春潮の「郭沫若先生「七請」理論再認識」とは、郭沫若が、35年9月20日発行の〈雑文〉第3号に寄せた詩集『宇宙之歌』¹⁸⁾の作者である東京左連の陳子鵠に宛てた2通の手紙「関于詩的問題」が中国国内で非難され、〈質文〉第4号（35年

12月15日)に「七請」を発表したのを受け、李春潮が郭沫若の所論を支持したものである。この一文は、事前に郭沫若に送られ、郭沫若が目を通し、郭沫若は、「私が粗雑に書き表した「七請」に対する認識はじつに深く、かつ補いにもなっている」と評している¹⁹⁾。

「論文・紹介」欄の最後に見える郭沫若が寄稿した「関于天賦」とは、李春潮が先の論文で、郭沫若が「七請」の六項目で「天賦+教育+努力+実践=一个文人」としてたことに対し、「実践+教育+努力+天賦=一个文人」とすべきではないかと提起したことに郭沫若が改めて自説を展開したものである。

李華飛たちは、<文海>同人たちの関係については創刊号の編集を終えた後、夏休みを利用して静岡県伊東に遊んだ。同行したのは、晏濟元、羅永麟、雷任民夫妻、梁薇娟等である²⁰⁾。

雷任民のことは、臧雲遠回想「“左連”紀事」(『左連紀念集』百家出版社 1990年2月)に出てくる。それによれば、彼は、山西、河北などの北方出身者が集う新宿などで持たれていた「聚餐会」に参加していた一人で、社会科学研究会、世界編訳社のメンバーだった。その奥さんとは于曉林。彼女は、36年3月李玉如等が結成した「留東婦女社会科学座談会」などで活動している。

この伊東での一夏の時、覃子豪は、陶映霞との「恋愛」のために一人東京に留まっていた。陶映霞は、上海復旦大学の出身で、その時、「留学生の花」と謳われていた才女で、詩を良くし、<文海>創刊号に詩「南風」を寄せている陶映霞がその人である。覃子豪は、彼女のところを足繁く訪ね、自身の詩作ノートを見せるな交際を続けていたが、やがてその「恋」も破れ、覃子豪は悲嘆の中に帰国する。

話を<文海>の方に戻す。彼らは伊東から戻るとすぐに<文海>第2期の編集に取りかかった。

彼らは、36年秋、李華飛、魏晋、宋寒衣、覃子豪等が連れ立って第2期の原稿を組むべく、郭沫若のところを訪ねている。郭沫若は、その時、座談会で話をした原稿を活字化することを承諾し、第2期に小説「君子国」を送ることを約束した。

以下は、そうした<文海>第2期の「要目」である²¹⁾。

- 郭沫若「君子国」(小説)
- 野薇「禍」(小説)
- 李虹霓「塩」(長編連載)
- 雷石榆「論国防文学的确立」(論文)
- 郭沫若「与大衆握手」(評論)
- 李春潮「論 M. 高爾基的芸術」(論文)
- 余頌「高爾基与文化事業」
- 覃子豪「大海的女兒」(散文)
- 彭湃「鉄蹄下的怒吼」(詩)
- 宋寒衣「離別之夜」(詩)
- 魏晋「論社会主義现实主义」(翻訳)

だが、この<文海>第2期は、結局、出版されなかった。

賈植芳は、その事情について、「私も誘われてこの(<文海>——小谷)編集業務に加わった。しかし、この刊行物は 第1期を編集し、友人に託し上海で印刷し、東京に送り返してもらおうと、日本

の警察に「すべて没収され、我々は日本警察の“危険分子”、“抗日分子”と見なされ」ようになり、雑誌も停刊になった、と記している²²⁾。

果たしてそうなのか、具体的なことは何も分かっていない。ただ、その時、日本側官憲が中国から日本国内に持ち込まれる文献、雑誌に「敏感」だったことだけは事実である²³⁾。

そして、まもなく日中戦争が全面化し、日本側官憲の弾圧が厳しさを増していく中で、彼らも一人、また一人と帰国していくことになる。

李春潮は、日中戦争が全面化する直前に逮捕され、取り調べで豪打され脳震盪を起こし、その後強制送還になった²⁴⁾。賈植芳はその夏の昼、下宿の文机の前でうたた寝をしていた時、官憲に踏み込まれ逮捕され、37年9月帰国する²⁵⁾。

このように、「文芸同人誌」〈文海〉の活動は、日中戦争の激化と共に「一号雑誌」で終わりをとげる。

最後に一枚の写真（「写真1」）をご覧ください。これは、彼らが〈文海〉第2期を編むべく、市川の郭沫若の住まいを訪ねた時のものである。写真右から覃子豪、宋寒衣、郭沫若、李華飛。写真を取ったのは魏晋である²⁶⁾。



写真1

注

- 1) 東京左連再建後の中国人日本留学生の文学・芸術活動の詳細については、中国文芸研究会〈中国文芸研究会会報〉第279号（2005年1月）から293号（2006年3月）まで連載した拙稿「東京左連再建後の中国人日本留学生の文学・芸術活動について」をご覧ください。また〈学术界〉など、時の中国人日本留学生が出していた諸雑誌については、同じ〈中国文芸研究会会報〉第294号（2006年4月）から断続的に連載した拙稿「東京左連再建後の中国人日本留学生が出した諸雑誌について」をご参照いただきたい。
- 2) 〈文海〉については、叢荊がつとに「“左連”東京分盟文献知見録」（『中国三十年代文学研究』上海社会科学出版社 1989年9月 所収）で紹介しているが、それはあくまでも書誌的な、B6版で2頁にも満たない簡単な言及でしかない。
- 3) 徐迺翔・欽鴻編『中国現代文学作者筆名録』（湖南文芸出版社 1988年12月）「李華飛」の項。
- 4) 注3と同じ『中国現代文学作者筆名録』（前出）の「賈芝」の項。
- 5) 賈植芳「憶覃子豪」（賈植芳『暮年雜記』漢語大詞典出版社 1997年8月 所収）。
- 6) 李華飛「隔海祭詩魂——記覃子豪」（〈新文学史料〉1987年第1期）。
- 7) 注6に同じ。
- 8) 詩人ベズイミヨンスキーについては、〈詩歌〉のこの論文ではじめて知った。〈詩歌〉の人々、そして陳紫秋、覃子豪が、なぜこの時、ベズイミヨンスキーに注目したのかなどは、いずれあらためて検討してみる必要があるだろう。私はこの詩人について同僚で、ロシア文学、日露文化交渉史などを専門としているの澤田和彦氏に問い合わせた。澤田氏からは丁寧なご返事をいただいたばかりでなく、昭和4年、素人社書屋から『サヴェート詩人選集』の「一」として尾瀬敬止訳の『ベズイミヨンスキー詩集』があるとのこと教授を得た。澤田氏には記して心からお礼申しあげる。
- 9) 日華学会『昭和10年度 第19回年報 自昭和10年4月至昭和11年3月』（昭和11年5月）。
- 10) 注6に同じ。
- 11) 丁裕「回憶『現世界』雑誌和引擎出版社」（〈出版史料〉5 1986年6月）。

- 12) 注 21 参照。
- 13) 注 3 と同じ『中国現代文学作者筆名録』（前出）の「蔡北華」の項。蔡北華「野火焼不尽、春風吹又生——東京左連活動的回顧」（『左連研究資料集』1991年1月 所収）。なお、時の中国人日本留学生のエスペラント運動については、拙稿「日中プロレタリア・エスペラント運動の交流——中国人日本留学生のプロレタリア・エスペラント運動を中心に」（『磁場』としての日本——1930、40年代の日本と「東アジア」・第1輯』2008年3月）をご参照いただければ幸いである。
- 14) 注 3 と同じ『中国現代文学作者筆名録』（前出）の「馬甦夫」の項。
- 15) 長いこと不明であった「駱駝生」のことどもについては、大久保明男が『『満州国』文学研究会』の会誌である『中国東北文化研究の広場文化——「満州国」文学研究会論集』第2号（2009年3月）に発表した「『満州国』の留日学生駱駝生と東京左連」に詳しい。
- 16) 秋田雨雀と時の中国人日本留学生との関わりは深い。その関係は、文学、芸術、演劇など多方面にわたっている。再建後の東京左連との関係一つを取っても、秋田雨雀は機関誌〈雑文〉に際し、印刷所（岩崎印刷所——小谷）を紹介し、〈雑文〉創刊号から文章を寄せ、〈雑文〉を編集した杜宣との関係は「34年冬」にまで遡る。したがって、その時、秋田雨雀と関係があったのは何も〈文海〉だけではない。だが、ここで興味深いのはそれが「特別寄稿」だということで、〈文海〉同人の誰がそれを秋田雨雀に懇請したのかである。秋田雨雀の「給中国的青年芸術家」とは、「中日関係が極度に困難にある時期、中国の青年芸術家たちが、人類の進歩に対する信念を失うことなく、しかも、いつ如何なる時においても我々日本の作家に友情の握手を以て差し伸べてくれる。これに対し私はかぎりない感謝の念を抱いている。だが、我々は十数年来中国の友人が我々に示してくれた友情に対し、何をなし得たか？それを思うと、本当に慚愧に耐えない」と書き出され、「私の言いたいことは、正確に民衆の苦悩、願いを表現することが出来た芸術こそが、人類の生活を向上させ得るということである。現代の中国の芸術家たちは、正確に中国の現段階の現実の積極性と消極性両面の事実を反映しており、それは単に中国の民衆に取っただけではなく、我々の芸術活動にも確かな反省を与えてくれる。いま私は中国の青年芸術家に対し、これ以上言うべきことは何もないのだが、ただ私は、彼らに限りない感謝の思いを抱いている」と締め括られている。これは、秋田雨雀が抱いていた、率直な気持ちと見ていいであろう。このように、この秋田雨雀の一文は、秋田雨雀と〈文海〉との関係というよりも、その時の中国人日本留学生の文学・芸術活動に対する秋田雨雀の思いを知る上できわめて興味深い内容になっている。
- 17) 李華飛「關於郭老在東京的回憶」（〈抗戦文芸研究〉1984年第1期 1984年3月）。
- 18) 陳子鵠の詩集『宇宙之歌』は、1935年、東京左連が関係した東流文芸社から「東流叢書」の一つとして出版された。表紙は呉天の手になる。
- 19) 郭沫若「關於天賦」（〈文海〉創刊号 本文出）。
- 20) 注 5 に同じ。
- 21) 注 17 に同じ。「要目」の原載は、36年10月16日発行の上海聯合雜誌社刊〈詩歌雜誌〉。
- 22) 注 5 に同じ。
- 23) 〈文海〉創刊と同じ頃、1936年8月16日、本文にも記した〈現世界〉半月刊が上海で創刊された。この現世界社は、36年に帰国した胡一声が起こしたもので、聯合出版社については本文に記した通りである。そしてこの時、日本では、〈現世界〉に関わる次のような事件が起きていた。官憲側資料には、「鏡一峯」の逮捕、強制送還について、「昭和11年8月上海に於いて同郷人胡一声中心となり、共產主義並びに反日宣伝を目的とする現世界社を組織するや基金10円を提供して加盟し同機関誌『現世界』に「中国と日本」なる論文を寄稿して抗日宣伝を為し、昭和11年9月以降同誌を5回にわたり420部を取り寄せて」とある。鏡一峯は、現世界社のメンバーで、9月2日以来〈現世界〉を国内に取り寄せ、神田成光堂等に販売を依頼していた。したがって、〈文海〉創刊号に対する「大量没収」もあり得ると思う。
- 24) 雷石楡「追思烈士林基路」（〈新文学史料〉1988年第2期）。
- 25) 注 5 に同じ。
- 26) この写真は、注 17 の李華飛「關於郭老在東京的回憶」（前出）に見える。

（埼玉大学教養学部教授）